〈資料紹介〉名古屋市蓬左文庫蔵「古文真宝抄」（笑雲清三抄）の文英清韓書入れ注記

――翻刻・解説――

山本佐和子

はじめに

名古屋市蓬左文庫蔵『古文真宝抄』（所蔵先資料名「魁本大字諸儒箋解古文真宝」、請求番号一〇一-二五、一〇巻二〇冊、有欠）は、五山僧・笑雲清三〔生卒年未詳、明応-天文頃（1492-1554頃）〕が漢籍「古文真宝」の抄物四点を集成・編纂した「笑雲清三抄古文真宝抄」の現存する写本の一つである（以下、「蓬左文庫蔵本」）。また、当該資料は、徳川家康の死後、蔵書の一部が尾張藩祖、徳川義直に贈られた「駿河御譲本（するがおゆずりぼん）」でもある。①

本稿は、この蓬左文庫蔵本に、五山僧・文英清韓〔永禄一一（1568）-元和七（1621）〕による書入れ注記が存することを報告するものである。清韓は、徳川家が豊臣家を滅ぼした大坂の陣の契機となった、方広寺鐘銘事件に際し、問題の鐘銘を作成した人物である。稿者は以前、同じく文英清韓の書入れが存する、大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集註分類　東坡先生詩』の調査を行っている（山本 二〇二〇、二〇二三所収）。蓬左文庫蔵本は、慶長二〇（1615）年の大坂夏の陣の直後、清韓の助命と引き換えに没収された、彼の蔵書の一つである可能性が高い。

本稿では、蓬左文庫蔵本への文英清韓の書入れを翻刻し、②抄物の伝本が、言語史資料のみならず、政治史、文化史資料となる可能性を指摘する。この書入れは、「笑雲清三抄古文真宝抄」諸本のうち、本資料が編纂者・笑雲清三に最も近いことを示唆するが、伝本関係の詳細は別稿を準備したい。

一　蓬左文庫蔵本の書誌

一・一書誌事項

蓬左文庫蔵本の書誌事項は以下のとおり。

〔資料名〕魁本大字諸儒箋解古文真宝（所蔵者整理書名）、一〇巻二〇冊（原典の巻六前半部分、欠）〔請求番号〕一〇一-二五

〔体裁〕改装砥粉色無地表紙　二五・七×一九・五cm、袋綴装四ツ目綴

〔料紙〕楮紙（虫損破損部分のみ補修あり）

〔外題〕題箋墨書「古文真宝抄」（松平秀雲筆）③

〔内題〕第一冊「魁本大字諸儒箋解古文真宝　巻之一」

〔写式〕寄合書（書写者は推定七名）、無辺無界半丁一三行、各行字数不定、漢字片仮名交じり文、全巻朱点朱引あり

〔総丁数〕（全冊合計、墨付）八〇九丁（各冊約三〇～七〇丁）

〔奥書〕第二〇冊巻末「是鈔者集　青松　梅菴　一元　湖月　之手抄々之／清三志」

〔蔵書印〕各冊冒頭「御本」（朱陽方印、三・四×三・四cm、甲印）

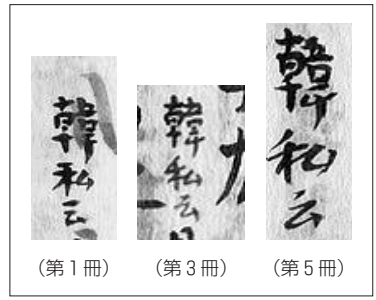
本資料は、「尾州家駿河御譲本書目」（元和末、川瀬一九三四の翻刻を参照）の二十七番に「古文真宝抄　廿冊」の記載があり、全冊に、川瀬論文で、「甲」に分類される「御本」印が捺されている。

また、複数名の書写になる寄合書だが、本の体裁から、全冊が同時期にまとめて書写されたものではないと考えられる。前半（原典「古文真宝後集」は、版本等で巻一～四、巻五～一〇の二分冊にされることが多い）の一〇冊は、比較的新しい。一方、後半には、古色を帯びるものがあり、特に、第一六・一七・一八冊には、元の写本を残すためと思われる補修が見られるなど、④損傷が激しくなった冊から、順次、書写し直されていったものと推定される。⑤文英清韓による書入れは全体に見られ、筆跡も大きく変化はないことから、清韓が所持していた時点でこの状態だったことは明らかである。

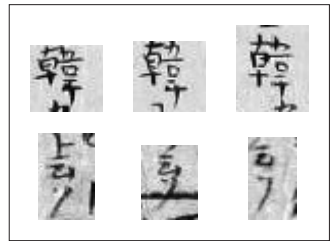
一・二　文英清韓による書入れ注記の状況

蓬左文庫蔵本は、抄物本文の上下の余白や行間に細字の書入れが数多く認められる。そのうち、「韓私云」が冒頭等に付く例が三十三箇所ある。それらの筆跡が大阪府立中之島図書館蔵元刊本の書入れと一致しており（山本二〇二〇、【図1・2】）、「韓私云」の「韓」は、文英清韓を指し、書入れは、清韓の自筆であると考えられる。⑥

なお、第二冊と第五冊に、比較的長めの解釈を別の料紙（糊付けの痕跡はなく、本文料紙より一回り小さい）に書いて、袋綴じの内



【図１：蓬左文庫本笑雲清三抄の書入】



【図２：中之島図書館蔵『東坡先生詩』書入】

が、桂林徳昌抄、万里集九抄、桂林徳昌講・一元光演聞書、桂林徳昌講湖月信鏡聞書の四抄を集成した「笑雲清三抄古文真宝抄」は、写本、古活字版・整版とも現存数が他の抄物より圧倒的に多く、最も流布したものとされる（柳田一九九二）。主な伝本は次のとおり。⑧

〔写本〕蓬左文庫蔵　室町時代写、一〇巻二〇冊（巻六後半欠）

石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）成簀堂文庫蔵　天文九（1540）-天文一二（1543）年写、一〇巻一五冊

市立米沢図書館蔵　天正一六（1588）年写、一〇巻二一冊（一之二、三之一欠）

静嘉堂文庫蔵　室町末江戸初期写、一〇巻一〇冊（存巻一下、二、三、四坤、五乾、七、八、九乾、九坤、一〇）

東京大学文学部国語研究室蔵　江戸前期写、一〇巻五冊

国立国語研究所蔵　室町末期写、一二冊【稿者未見】

南禅寺天授庵蔵、室町後期写、存巻一之一、一冊【稿者未見】

身延文庫蔵、室町写、存巻一〇、一冊【稿者未見】

【現所在未詳】積翠軒文庫旧蔵、室町末期写、一〇巻一二冊

〔古活字版〕※所蔵先省略

①元和三年四周単辺古活字版　一〇巻一三冊

②無刊記四周双辺古活字版　一〇巻一三冊

〔整版〕※現存多数

側に入れた箇所がある。第五冊の注記は、末尾に「已上ハ清韓私ニ記之ソ」とあり、筆者は明らかである。第二冊の注記は、筆跡から清韓と推定できるため、今回の翻刻に含めた。

二　笑雲清三と文英清韓の関わり

二・一「笑雲清三抄古文真宝抄」について

「古文真宝」（前集一〇巻・後集一〇巻）は、宋～明代頃に編纂された漢詩文集で、主に文章を集めた後集には数多くの抄物が現存することから、五山禅僧が愛好した漢籍として知られている（芳賀一九四五・一九五六、星川一九六三、等）。

なかでも、笑雲清三〔生卒年未詳、明応-天文頃（1492-1554頃）〕

江戸前期整版　一〇巻一三冊

伝本が多い理由として、室町末期には、天皇家・摂関家を含む公家層のほか、新興の上層武家層にまで、漢籍「古文真宝」が受容されたことが関わっていると考えられる。

成簀堂文庫蔵本は、現存する写本のうち、最も古い書写奥書を持つが、箱書によると、加賀藩前田家旧蔵で、家老・今枝家の所有を経ているとされる（『新修成簀堂文庫善本目録』、参照）。

市立米沢図書館蔵本は、笑雲清三抄の中では最も有名な写本である。妙心寺の南化玄興〔1538–1604〕が上杉家の重臣直江兼続〔1560–1619〕の学識に感銘し、蔵書を書写することを許したという識語を有するためである。南化は、巻頭の識語に加えて、全冊分の直筆題箋を兼続に贈っている。林下（官寺の五山ではない臨済宗寺院）の僧侶から戦国大名の家臣へという伝播の経緯は、抄物の担い手、受容者の史的変容を示す点で貴重である。

二・二　文英清韓と古文真宝の抄物

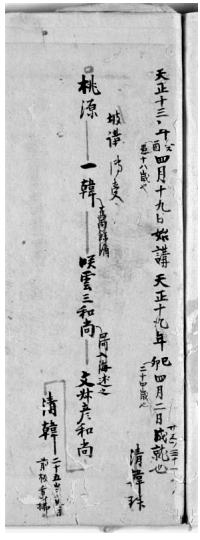
蓬左文庫蔵本に、注記を書入れた文英清韓は、大阪府立中之島図書館蔵元刊本『増刊校正王状元集註分類東坡先生詩』（「四河入海」の原典）に、大量の仮名注記を残すと共に、巻末に、自らが笑雲の学統に連なるものという識語を残している【図3】。

文英清韓は、笑雲清三と法脈上は師資関係にはないが（玉村一九八五）、ともに東福寺を本拠とする聖一派（慧日派）に属して同寺の天徳庵に住したこと、出身が伊勢で、一時期、同国の無量寿寺や鎌倉の建長寺にいたことが共通する。

なお、柳田（二〇〇四）は、古文真宝後集の抄物のうちの一種を、その古活字版の冒頭に見られる次の「韓私云」の一文に基づき、「文英清韓抄カ」とする。全く同内容の抄文が、蓬左文庫蔵本の清韓書入れ注記に認められる。

(1)　韓私云、建仁常庵和尚之古文真宝ハ唐本也、此本ニ云、古文真宝箋注釈大全巻之一ト下ニ／松塢門人京兆劉剡、音校ハ、永陽麟峰後学黄堅編集トアルホトニ、無疑乎、但先輩／不見此本乎、

（蓬左文庫蔵本・一10オ＝彭叔守仙抄古文真宝抄・古活字版一1オ）



【図３：大阪府立中之島図書館蔵，元刊本『増刊校正王状元集註分類東坡先生詩』第28冊巻末識語】

山本（二〇二三）では、柳田氏が「文英清韓抄カ」とされた抄物が、東福寺の彭叔守仙〔1490-1555〕が、能登守護の畠山義総〔1491-1545〕の依頼で作成した抄物であることを報告している。右の一文が、なぜ彭叔守仙抄の古活字版に紛れ込んだのか、経緯の解明が俟たれる。

三　文英清韓書入れ注記の内容と用途

あとの翻刻に見るように、文英清韓による書入れ注記（以下、清韓書入れ）の内容は、前掲(1)のような先学のエピソードのほか、語句や事物の説明、複数ある解釈の可否等で、抄物では一般的な内容である。別紙に書いた長めの注記がある二カ所も、巻二別紙は原典の口語的な解釈を、巻五別紙は典拠の口語的な解釈を記す。

内容からは、清韓が自ら古文真宝を考究した痕跡とは考えにくい。例えば、巻二別紙に相当する箇所に、笑雲清三抄では長文の漢文抄が続く。清韓書入れは、講義の下準備のメモ（手控）の可能性がある。

蓬左文庫には、現在把握している限り、他に三点、文英清韓による書入れ注記を有する抄物がある。「聽松和尚三体詩之抄」（二冊、請求番号一〇一・二）、「東福寺湖月和尚三体詩之抄（蓑庵剰穫）」（三冊、請求番号一〇一・二一）、「仏制比丘六物図抄」（一冊、請求番号一〇四・七二）である。一点目の「聽松和尚抄」には、慶長一五（1610）年という年が入った注記が見られる。

(2)　今ノ慶長十五年庚戌マテハチヤウド三百年也。

（聽松和尚三体詩之抄・上6ウ）

「聽松和尚抄」の抄文には、原典の序文が書かれた「至大二年」、「応長元年辛亥」から、[9] 聽松＝希世霊彦が抄物を作成した明応五（1496）年までは「百四十四年」（清韓とは別の注記で百八十六年に訂正）であるとあり、書入れは清韓が注記した年で数え直したものと思われる。講義をする時から数えた年数は、聽衆の関心に叶い、このような例からも、書き入れ注記は講義の手控と考えられる。

四　方広寺鐘銘事件との関係

はじめに述べたように、当該資料は、大坂夏の陣の直後に没収された、文英清韓の蔵書の一点と考えられる。本抄に直接関わる記述は、未だ古記録等に見いだせていないが、白石虎月編纂『東福寺誌』（東福禅寺、一九三〇年）には、関連記事が多く見出せる（一部、表現を改める）。

慶長二〇（1615）年（七月、元和に改元）五月　大坂夏の陣、豊臣家滅亡

九月二八日　幕府、東福寺にて文英清韓所持の長持・書籍を探

索し、東福寺に預ける

一〇月一四日　文英清韓捕縛〔金地院日記〕「此中も韓長老物之本儀、被仰出、此方へ御取とりよせ可被成様に、御諚候間それも慥に、仰出承届御左右可申候、相国寺より出候本の儀も申上候、猶も本共五山の間、其外をもせんさく、尤も禁中へ上り候本之儀も申上候。」

一一月一四日　幕府、禁中にあった文英清韓所持の「四河入海」「帳中香」等を押収する

文英清韓が貴重な典籍を多く所持していることは、徳川側も把握しており、特に、以心崇伝（金地院崇伝）が関心を寄せて没収を画策したことが、日記「本光国師日記」等から分かる。

まとめと今後の課題

蓬左文庫蔵本「笑雲清三抄古文真宝抄」の来歴は、抄物の受容層の変化や、それに伴う作成や使用目的の変化を窺わせる。すなわち、織豊期には、上層武家が、漢籍の宋版・明版や日本古典の善本と共に、抄物についても、伝来の確かな写本を所有することが一種のステイタスとなっていたようである。蓬左文庫蔵本は、徳川家が、上杉家や前田家より、作者に近い善本を入手したものと見ることができる。慶長以降、数多くの抄物が、古活字版で版行された背景には、同時代の抄物への高い評価があったことは注意されるべきであろう。

本抄の古活字版が、家康没後から間もない元和三年正月に刊行されていることも注目される。本抄の元和三年古活字版とその覆刻である江戸前期整版は、蓬左文庫本とごく近い本文を有する本から版が起こされている。慶長から寛永期の「古文真宝後集」の整版には、「清韓本」と通称される本があり、一部は、慶長一九（1614）年の清韓自筆跋を持つ（和田一九三三、渡辺一九九五）。本抄の版行にも、文英清韓や周囲が関わった可能性が高い。近世初期の抄物の版行には、このように先学の抄物を継承していた五山僧が関与した例があると考えられ、経緯や背景の解明が課題である。

注

① 徳川家康の死後、尾張徳川家に分譲された家康蔵書は、三七七件二八九三冊。明治維新の際に、蔵書の払い下げ処分が行われ、約三分の一を処分。現在は、二五七件一八七一冊が所蔵されるという（川瀬一九三四、名古屋市蓬左文庫『蓬左』32、一九八七年）。

② 同資料の書入れの中には、筆跡から清韓のものと推定されるものもあるが、今回は、「韓私云」を冠するものと、筆跡から文英清韓のものと推定できる長文の付箋二点を中心に扱う。

③ 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』（名古屋市教育委員会、一九五七年）による。松平秀雲（君山）は、尾張藩士の儒者。

④ 三冊は、文字が書かれた小型の料紙の周囲にごく細い糊代をとり、白紙を糊付けする形で、他の冊と大きさを揃えてある。文字が書かれた小

型の料紙（元の本）の寸法は、先行抄（桂林抄）の伝本のうちの一点、東北大学附属図書館蔵本（蓬左文庫旧蔵）と一致することから蓬左文庫本の原形と思われる。詳細は今後の課題である。

⑤「古文真宝後集」は、前半所収の作品のほうが好まれたようで、どの抄物でも前半の注釈が詳しく、分量も多い。蓬左文庫本で、前半が比較的新しい体裁なのは、頻繁に利用されたがために損傷が早く進んだためと考えられる。

⑥「〇私云」（〇には、禅僧の場合は法諱の下字が入ることが多い）は、抄物で聞書の作成者や、編纂者などが自説を書き入れるときに一般的に用いる表現である。主に、集成抄物や書入れ抄物（原典漢籍の欄外空白に注釈を書入れたもの）等で用いられ、当該の文章が漢籍や先学の講義、先行抄に拠らないことを示す出典表示として機能する。自説であることを誇示したり、謙遜したりするものではない。本抄も含めて抄物では、名前の略号のない「私云」も用いられ、本抄の場合は、笑雲清三と推定できるが、「私云」が誰の注釈か特定できていない資料も多い。

⑦第二冊の別紙は、巻末最終丁の袋綴じの内側に、二つ折にして、右端を綴じ込んだ状態になっており、隠したかのように見える（写真撮影は不可能）。第五冊のものは、袋綴じの内側に挟み込んであり、取り出してみることができる。

⑧諸本は、柳田（一九九二・二〇〇四）に基づく。一部、残存状況、書写年代を私に補う。

⑨元の至大二（1309）年と本邦の応長元（1311）年では、年が異なる。辛亥は後者で、訂正注記も一年誤っているが、一三一一年で数えている。

調査資料

○笑雲清三抄「古文真宝抄」蓬左文庫蔵本、成簀堂文庫蔵本、市立米沢図書館蔵本…原本調査、及び、所蔵先提供の画像データ、マイクロフィルム紙焼　○大阪府立中之島図書館蔵元刊本『増刊校正王状元集註分類東坡先生詩』書入れ注記…原本調査、および、デジタル画像紙焼　○本光国師日記…『本稿国師日記』続群書類従刊行会

参考文献

上村観光（一九一二）『五山詩僧伝』民友社

川瀬一馬（一九三四）「駿河御譲本の研究」『書誌学』3-4

白石虎月編纂（一九三〇）『東福寺誌』東福禅寺

玉村竹二（二〇〇三）『五山禅僧伝記集成：新装版』思文閣出版

玉村竹二（一九八五）『五山禅林宗派図』思文閣出版

芳賀幸四郎（一九四五）『東山文化の研究』河出書房

芳賀幸四郎（一九五六）『中世禅林の学問および文学に関する研究』日本学術振興会

星川清孝（一九六三）「古文真宝解題」『古文真宝（後集）　新釈漢文大系・第16巻』明治書院

堀川貴司（二〇一五）『続　五山文学研究　資料と論考』笠間書院

柳田征司（一九九二）「桂林徳昌講一元光演聞書『古文真宝抄』彦龍周興講某聞書『古文真宝抄』について」『続抄物資料集成　第十巻　解説・索引』清文堂出版

柳田征司（二〇〇四）「抄物目録稿（原典漢籍集部の部）」『訓点語と訓点資料』113

渡辺守邦（一九九五）「『尤之双紙』の汝ガ生タルヲ嗟ク――清韓本『古文真宝後集』の諸版――」『実践国文学』47

和田維四郎（一九三三）『重刊　訪書余録』弘文荘

山本佐和子（二〇二〇）「大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注

分類　東坡先生詩』の書誌的考察」『人文学』（同志社大学人文学会編）205
山本佐和子（二〇二三）『抄物の言語と資料――中世室町期の形容詞派生と文法変化――』くろしお出版

〔付記〕貴重な資料の閲覧調査をご許可頂きました、名古屋市蓬左文庫、石川武美記念図書館成簣堂文庫、市立米沢図書館に記して感謝申し上げます。本稿は、第一二九回国語語彙史研究会（二〇二二年九月、於オンライン）における研究発表の一部を、加筆・修正したものです。発表の席上、貴重なご意見を賜りました。本研究は、JSPS科研費 17K13464、21K00548、21H04349の助成を受けたものです。

翻　刻

○凡例

〔書入れの所在〕

- 以下は、名古屋市蓬左文庫蔵「笑雲清三抄古文真宝抄」（所蔵先資料名「魁本大字諸儒箋解古文真宝」、請求番号一〇一-二五、一〇巻二〇冊、有欠）に存する、文英清韓による書入れ注記の翻刻である。
- 清韓書入れの所在について、蓬左文庫本の冊（対応する原典「古文真宝後集」の巻次）ごとに、丁数、書入れが存する場所を示す。書入れは、抄物本文の上部やミミ、ノドの余白、行間等になされている。それぞれ、「本文上」「ミミ」「ノド」「行間」等で示す。参考に、書入れが付された原典・笑雲抄の箇所を、【「作品名」語句・表現】の形で付記する。

（所在の表示）丁数・場所【「作品名」原典の該当箇所】

例、**18オ・行間**【「秋風辞」懐佳人兮】

- 特に、上部の余白への書入れの場合、後世の化粧裁で行頭数字分が欠損している箇所が多い。凡そ、推定できる文字数を□で示し、改行箇所に「／」を補入する。
- 巻一六～一八は、抄物本文が書かれた料紙の周囲に糊付けされた紙に書入れがなされており、所在を「台紙」とした。

〔用字〕

- 用字は、現在通行のものを用いる。
- 濁点は底本のままである。
- 清韓書入れには、朱墨の句切り点が入る例が多い。判別できる限り、「、」で翻刻した。読解のため、読点の一部を補った。
- 清韓書入れでは、原典「古文真宝後集」もしくは、「笑雲清三抄古文真宝抄」の中の語句を引用し注記することが多いが、引用されている語句は特に区別しない。長文の書入れで、区別したほうが分かりやすい例についてのみ、引用語句を「　」に括って示す。
- 虫損、欠損は、［　］で示す。虫損、欠損により、判読に疑いが残る場合は［?〇］で示す。
- 字形が不明瞭で、判読に疑いが残る字については〔?〕で示す。

翻刻

第一冊（古文真宝後集・巻一）

2オ・本文上【「序」而挾兎園冊黨庠術序間者】

□私云。礼／□学記云、／□教者、／□有レ塾、／□有レ庠／□有レ序、／有レ学、／□ハ書堂ノ、／□ノ術ハ当シ／□州ニ一注シテ、／□字ノ心ソ、

2オ・ミミ【「序」而挾兎園冊黨庠術序間者】

術ハ、韻会注、技也、又道業也、又述字注、通作術也、此心ハ述スルノ義カソ、

2ウ・本文上【「序」而挾兎園柵黨庠術序間者】

［　］ヲ黨ト、／一五百、／為レ州、／□モ序モ、／□学校／□ソ、学ノ一ニ／□ナリ、

2ウ・本文上【「序」而挾兎園柵黨庠術序間者】

□私云、黨、／術ーハ学／□事ソ、唐ニハ／□校ト云テ、／□ニモ郷／アルソ、

3ウ・作品後の空白【予寓書林亦年、得一善士、而与之友者先生之高弟也】

韓私云、「予寓スル事書林ニ亦年トシアリ、得テ一リノ善士ヲ、而モ与レ之レ友タル者ノナリ先生ノ之高弟也ナリ」ト点ヲヨミテ、／「高弟」ハ一リ善士ヲ云ソ、林以正カ高弟ノ弟子テ、アルソ、高第ダイトナシテノ時モ、孟子ノ序ニモ／高第ノ弟子公孫丑万章トアレハ、ヨキ弟子ト云心ソ、高第ハ才ノ優タヲ云也、／然観其徒則可以知其師矣、其弟子ヲミテ其師ヲ知ト云ナレハ、殊高第ハ／ヨキ才ノ優タ弟子ト云心ソ、此抄ノ義、恐ハ不可歟、林以正ヨリモマシタ人ト云ハ／以正ハ面目ヲ失タ者ソ、只、高弟トシテモ、高第トシテモ以正カヨキ弟子ト／見タラハヨカラン歟、

10オ・作品末【書名「魁本大字諸儒箋解古文真宝」の注釈の最後】

韓私云、建仁常庵和尚之古文真宝ハ唐本也、此本ニ云、古文真宝箋注釈大全巻之一ト下ニ／松埼門人京兆劉剡、音校ハ、永陽麟峰後学黄堅編集トアルホトニ、無疑乎、但先輩／不見此本乎、

18オ・行間【「秋風辞」懐佳人兮】

韓私云、毛詩ニ簡兮編云、山ニ有リ榛シン、湿サウニ有レ苓レイ、云コヽニ誰ヲカ之思フ、西セイ方ノ美人、彼ノ美ナル人ハ兮、西方ノ之人兮ナリ、ト云語勢□

27ウ・本文上【「漁父辞」作者屈原の「史記」列伝二四の引用】

韓私云／□記注云、／［？漁］隠曰、／□音烏／□反、温

第二冊（古文真宝後集・巻一）

12オ・ミミ【「弔屈原賦」章甫薦履】

韓私云、章甫、細布冠也、云々、以テ漆布ヲ為レ之ヲ、論語大全先進篇ニアリ、

巻末別紙【「秋声賦」題注「此篇最善形容物象鋪叙模写変態不窮、末帰於人生、憂感與時倶変、使人読之、有悲秋之意」、賦本文二段途中まで】

【題注】「物象」ハ、万物ノ象也、形容ハカタトリカタトルソ、「形容ー」トハ万物ノ春生夏長秋ーノ体ヲカタトツテ、此文ニ書／イタソ、「模ー」ソ、「変」ハカハルソ、「態」ハ物ノ体ソ、／「末」ハ此篇ノ末ソ、「感」ハ撼（ウコク）也、愁カ撼ソ、「使人ー／之」ハ此篇ソ、此篇ヲヨメハ、悲秋ノ心カデクルソ、

【賦本文】「欧陽子ー」子ハ男子ノ通称也、此発端ニ我名ヲ呼出タカ／面白ソ、七月ノ時分ソ、／「聞ー」聞ハ凡聞ニ聞ノ字ヲ用ソ、「聴」ハ詳ニ聴ニ聴ヲ書ソ、／シン〳〵トシテ、書ヲ読ニ聞ケハ、何ヤラ声カスルソ、トコヨリ此声カ／クルソト云ハハ、「西」「　」ヨリノ事ソ、「驟（ニハカニ）」「驚」ハ、□（判読不能一字）、ソヨク心也／注ニ窓ハ江ノ韻ニ入テサウソ、ソウト云ハ「　」ソ、ソウト云時ハ、東韻ニ／入テ烟リダシソ、マドテハナイヲ誤テ、マトヲ窓（ソウ）ト云ソ、／「触其ー」物ハ万物ソ、風ハ万物ニ當テ鳴ル物ソ、／「金鉄ー」秋ハ金ナルニヨツテ、「金鉄皆ー」ト云ソ、①／「切々」ハキリキサムヤウナソ、「號」ハ虎ノ嘯ク声ソ、「奮発」ハフルイ／ヲコスソ、／「豊草ー」ヲハ春トミルソ、「佳木」ヲハ夏トミルソ、

第三冊（古文真宝後集・巻一）

17オ・行間【「前赤壁賦」固一世之雄也。而今安在哉。】

韓私云、月渓云、安在ーハ曹ハ一世ノ雄ナレトモ、今ハハヤ死去テ、無ソト感慨ヲ起タソ、

39オ【「憎青蠅賦」荘生安得與胡蝶而飛揚の注】

韓私云、注ニ翂々ハ、悦皃、又飛皃、蘧々ハフンノビテネタ皃

「　」僵ハ［?直］皃ソ、

第四冊（古文真宝後集・巻二）

5ウ・ノド【「師説」是故聖益聖愚益愚の注】

韓私云、松月云、注、結得主ートハ、愚ニナランモ、聖ニナランモ我意カラソト云心ソ、

6オ・行間【「師説」愛其子、択師而教之。於其身也、則恥師焉惑矣。】

韓私云、松月云、其身ヲ云ヲ、子ノ身ト云ト、其親ノ身ト云ト、二義ソ、

第五冊（古文真宝後集・巻二）

18ウ・行間【「進学解」周詰殷盤の抄文「殷―ハ毛詩ニ殷盤篇アルソ」】

韓私ニ尚書ニコソアレ、毛詩ニハナイソ、

19・袋綴の中の別紙②【「進学解」周誥殷盤について、『尚書』中の関連個所の概略を述べたもの】

殷盤ハ、韓私云、尚書第五篇名也、盤庚ト云是也、盤庚ト／云ハ、殷王ノ名、祖乙ノ曽孫也、盤庚ノ殷ノ都ヲ遷サントセラル、ヲ、／民カカナシムホトニ、盤庚篇上中下ヲ作テ、民ニツケラル、ソ、／上篇ハ、告二群臣一ニ、中篇ハ告二庶民一ニ、下篇ハ告ツル百官族姓一ニ也、下篇ハ／都ヲ遷シテ後ニ作ルソ、殷湯ヨリ、盤庚ニ至ルマテ、五タヒ都ヲ遷／スゾ③、

周誥ハ、韓私云、周五誥ト云カアル、尚書ノ篇ノ名也、大誥康誥、／酒誥、召誥、洛誥ヲ五誥ト云ソ、誥ハツクルトヨムソ、

大誥ハ、尚書第九ノ篇ノ名也、此篇ニハ、「周武王崩後ニ」、三監カ叛スルホトニ、周公旦ノ東／征シテ討スルソ、此事ヲ天下ニ告ルホトニ、大誥ト云ソ、大誥ハ大ニ誥ル／也、三監トハ菅叔蔡叔ト紂カ子ノ武庚トソ、

康誥トハ、尚書ノ八ノ篇名也、康叔ト云ハ、文王ノ子武王ノ弟也、成王スデニ、／菅叔蔡叔ヲ伐テ後ニ、康叔ヲ衛ノ国ニ封スルホトニ、康誥ヲ作［　］／告ルソ、サルホトニ康誥ト云ソ、

酒誥トハ、書ノ十二篇ノ名ソ、紂カ淫楽テ、長夜ノ飲ヲナス／民モコレニ化シテ、酒ハカリニテ朝夕［墨滅］クラス、今ハ紂ハ死シテ後ニモ其余／習カ残リテ、酒ヲノムホトニ酒ハワルキ物ト云事ヲ作テ、衛ノ民ニ／教ルソ、故ニ酒誥ト云ソ、

召誥トハ、書ノ十四篇ノ名、成王ノ洛邑ニヲラントテ、召公ヲシテ地形／ヲミセラル、、召公ノ地形ヲ見テ戒ヲノヘテ、成王ニ告ルソ、其事ヲ／史官カ記シタ篇ソ、洛邑ハ、天下ノ中ナルニ依テ、武王ノ此ニ都セント／ヲモハレタホトニ、成王、其志ヲ継テ、洛ニ都スルソ、

洛誥トハ、尚書第九篇ノ名ソ、此ハ召公洛ノ地形ヲ見テ、ウラヲス（占）ル／事ソ、其後ニ周公往テ、洛ニ邑ヲ作ル也、占ヲシテ吉兆ヲ得タト云事ヲ／云タソ、

已上ハ清韓私ニ記之ソ④、

22ウ・行間【「進学解」先生曰、吁、子来前。】

韓私云、吁（ヲンノ）トハ疑イ怪ム辞ソ、

第六冊（古文真宝後集・巻三）

19オ・ミミ【「送孟東野序」其沸也或炙也。】

［？韓］私云、其沸也、ーーハ諸抄ノ心不可歟、湯ヲワカスニモ下ニ火ヲ焼テ炙レハ湯カ沸ト云心歟、

第七冊（古文真宝後集・巻三）

26ウ・行間【「滕王閣序」得仙人之旧館。】

韓私云、洪崖カ居タ処ナレハ、仙人ノ／旧館ト云ソ、

第八～一一冊（古文真宝後集・巻四、巻五「箴類」）：書入れ注記なし

第一二冊（古文真宝後集・巻五）

17ウ・行間【「西銘」不愧屋漏為無忝。】

韓私云、屋漏トハ、西北ノ陽ノクライ処ヘ朝日ノ光ノモリクル様ニシテヲクホトニ、屋漏ト云ソ、ソコニ神アルソ、（続き、本文上）

□ハ帳／□帳ヲ／□テ／□ソ

19ウ・行間【「西銘」申生其恭也。】

韓私云、申生ハ重耳ノ兄也、献公ノ太子也、湖ノ／義、恐クハ不可歟、

第一三冊（古文真宝後集・巻五）

3ウ・ノド【「北山移文」勒移山庭。】

□私云、／文選廿二、北山移文之注云、勒（ロクストハ）、移山庭（トハ）、刻（キサムナリ）移文ヲ、於山庭ニ也⑤

11オ・行間【「北山移文」至其紐金章…の抄文「サキノ墨ソメノ衣ヲハトツテ置テ黄ニナルソ】

韓私云、一抄ノ義不可也、金章墨綬ハ県令ノ印／ト綬ソ、官人ノ装束也、綬ハ、佩玉紐也、

24ウ～25オ【「弔古戦場文」屍填巨港之岸、】

韓私云、港ハ韻会ニ港水分流也、増韻又水中行舟道、玉鑑云港音講、水煙也、□（？玉）篇云港古項切水□也、広韻云水□⑥、

27オ・行間【「弔古戦場文」周遂獫狁～穆穆棣棣】

韓云、周文王ノ時ノ事ソ、毛詩ノ出車ノ篇ニ此事アリ、六月ノ篇ハ宣王ノ時ノ事ソ、

第一四冊（古文真宝後集・巻六）：清韓書入れなし

第一五冊（古文真宝後集・巻七）

39オ・行間【「諱弁」愈曰、然。律曰、二名不偏諱。】

韓私云、曲礼ニ律曰ノ二字ナシ、松ノ義恐不可也、湖義可也

40ウ・行間【「諱弁」丘與蓋之類是也。以下の注】

韓私云、此注ハ全ク曲礼ノ注ヲソノマ、置ソ、

42オ・行間【「諱弁」周公作詩不諱の注】

韓私云、駿發ー、梅ノ点、相違也、鄭カ義、／駿ハ疾トシテ、トク

トヨマセタソ、毛ハ駿ヲヲホイニトヨマセ□ソ、

第一六冊（古文真宝後集・巻八）：清韓書入れなし

舒ハ／□［？先］ノ与国ト云テ、クミノ国ソ／□王ヲモヨクコラシテイマシメタソ、／□王モウタレタソ、是ハ斉ノ／□候ニ随テウタレタソ、／是ヲホメタソ、此文ニ云タハ、昔モ戎狄ヲハウタレタ、今仏法夷狄ノ法ヲ用ルハクセ事ト云事ソ、

第一七冊（古文真宝後集・巻八）

36オ・本文上、台紙【「陳情表」朞功の抄文「朞功ト云ハ、喪服ニ五等ノ次第アリ、大功小功ト云」】

韓私云、大功小功ハ叔父ヤイトコ／ナントノ死タ時ニ九月ヤ五月ノ／□ミヲスル事ソ、妻ノ父ヤナントハ、／［？紬］麻ソ、大功モ小功モ、紬麻／ノ喪服ノ［墨滅］シタテヤウノチガ／イソ、一元ノ説ニ、功ハ親ノ喪ソ／□云説、甚タ不可也、

第一八冊（古文真宝後集・巻九）

14オ・本文上、台紙【「原道」道與徳為虚位の注】

韓私云、注、頓挫ハ手ノ裡ニスル／心ソ、

37オ・本文上、台紙【「原道」経曰夷狄有君、不如諸夏之亡。】

韓私云、戎狄ー荊ー是ハ、／□詩ノ魯頌ソ、閟宮ノ篇ノ／后ソ、閟宮篇ハ魯ノ僖／□カ周公旦ノ昔居ラレタ土／□ニ居ラレテマツモトノ周公ノ／□ノヤウニナツタホトニ是ヲホメテ／□［？作］タ詩ソ、戎ー荊ートハ／□戎北狄ヲモ此僖公ハヨク／□タレタソ、荊ハ楚ソ、

第一九冊（古文真宝後集巻九）

7ウ・行間【「過秦論」「崤」の異文「殽」についての抄文「桀之祖父也、私云夏禹事ソ」】

韓私云、此義非也、夏禹ニアラ／ス、孔甲ノ子也、桀カ祖／父也、

第二〇冊（古文真宝後集巻一〇）

4オ・行間【「上張僕射書」孟子有云、～而忘其君者。】

韓私云、孟子四、公孫丑下ニアリ、

4オ・本文上【「上張僕射書」孟子有云、～而忘其君者。】

□私云、／□下知／□イテ、／□リ、／□ル事ヲ／□テ、／□教／□ワク、□ヲ□マ／ソ、サルニヨリテ、今ノ諸候ハ大ニ人ニ過タル事カナキソ、臣ニ諫ヲウケテヨカランモノヲソ、

17オ・行間【「答韓荊州書」此疇曩心跡、安敢不尽於君侯哉。】

韓私云、白カ我カ前方ノ事ヲ尽シテ、荊ニ云タト云心乎、湖ノ義如何、

20オ・行間【「答韓荊州書」且人非堯舜。】

韓私云、荊ヲヲトイタテハアルマイソ、白カ我カ事ヲ云テアランソ、

注

① 次の注釈まで、原典の一部を欠く。

② 別紙の料紙は、本全体と比べてやや薄手の楮紙だが、特に新しくは見えない。内容のほか、別紙の虫損箇所が、前後の丁と一致することから、かなり長期間この箇所に挟み込まれていたものと推定できる。

③ 内容ごとに改行がなされているので、翻刻もそれに従う。

④ 「已上ハ」以下、三字分ほど下がっている

⑤ 返り点は綴じ込まれて、確認できない状態になっている。

⑥ 已上二字分□は、綴じ込まれて確認できない。